

出土遺構としては、沖城の内外を画すると考えられる数条の溝状遺構がある。これらは一九六二―六六年に行なわれた耕地整理以前の字図や航空写真に見られるソイルマークと一致した地点で検出された。耕地整理時まで使用されていたも

1 所在地 長崎県諫早市仲沖町・幸町

2 調査期間 一九九八年（平10）一月～一九九九年二月

3 発掘機関
諫早市教育委員会

4 調査担当者 秀島貞康・川瀬雄一・古賀 力・橋本幸男

5 遺跡の種類 城跡

6 遺跡の年代 中世・近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

今回の調査は、市道の拡幅工事に伴うもので、一九九七～九八年に計二二二一m²の範囲について本調査を実施した。

出土遺構としては、沖城の内外を画すると考えられる数条の溝状遺構がある。

これらは一九六一～六六年

に行なわれた耕地整理以前の字図や航空写真に見られるソイルマークと一致した

地点で検出された。耕地整理時まで使用されていたも

のと一六世紀後半に埋没したものとがあり、埋没に時期差のあることが窺えるが、後者は城として一旦機能停止した時期を示すものと思われる。明青花・唐津などの陶磁器や瓦のほか、多数の木製品が出土した。

他の遺構には、砥石・粘土塊・砂を含む複数の土坑からなる土坑群がある。土坑外からも甕羽口や鉄滓の付着したるつぼなどが出土していることや、柱を有し覆屋が存在した土坑があることから、複数の土坑が群として機能していた「鑄造関連土坑群」と判断した。

繪唐津・二彩唐津・肥前磁器なども出土していることから、西郷氏の支城としての機能は一六世紀後半に一旦停止し、のちに当地へ入部した龍造寺氏によって一七世紀以降も維持されていたと思われる。

木簡(1)は溝状遺構から、木簡(3)～(5)は鑄造関連土坑群から出土した。

8 木簡の釈文・内容

溝狀遺構

(1) 態一不□□□□取□□ (表面)

（左側面）

（裏面）

☐ ☐ ☐ ☐ ☐ (右側面) 248×20×12 011

(2) ・「□□三□入□□□」
 「□□□村」

(142)×24×4 019

鑄造関係土坑群

(3) ・「□□三つ入□」
 「金カ」

118×18×4 032

(4) ・「□□三つ」
 「金カ」

118×20×5 032

(5) ・「□□三つ」

(118)×(24)×6 081

(6) 石勺斗□
 「田カ」

307×35×8 065

(1)は角柱状を呈し、上下を加工、三面に刻み・円形のくぼみが施されるなど、二次的に使用されている。表面は上下が欠け文意不明。裏面は割取されている。呪符の一種か。

(2)は上部がわずかにすぼまる。下端はわずかに欠損。数量・人名の記載と思われ、物品調達の覚えであろう。

(3)はほぼ完形で、上部に切り込みを有する。(4)は破損しているが、(3)と同様の形状であろう。(5)は傷みがあり形状不明。左側の文字は

判読不能。(6)は升などの木製品の底部の側板かと思われる。

9 関係文献

諫早市教育委員会『沖城跡』（諫早市文化財調査報告書第一四集 二〇〇〇年）

（川瀬雄二）

